

「皇帝のものなら」

(マルコ12:13-17/マタイ22:15-22/ルカ20:20-26)

挽地茂男

2019.1.27 日本基督教団千歳丘教会礼拝

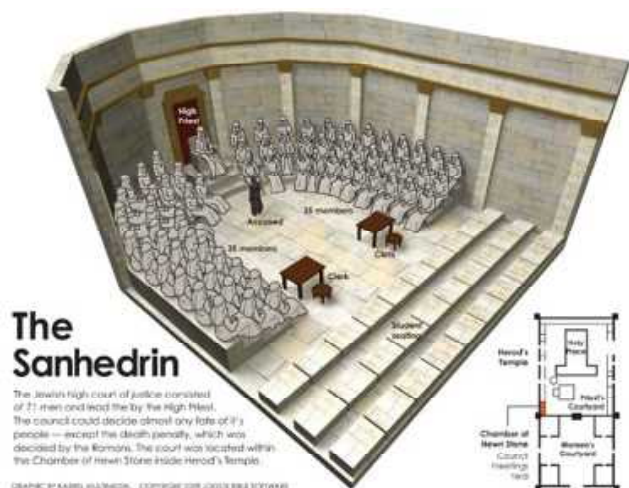
※マルコの本文は最終頁にあります

わたしたちは、今、マルコによる福音書の第2論争物語集(11:27-12:37)を学んでいます。先週の「ぶどう園と農夫の譬え」の終わりに近づいたとき、エルサレムの宗教指導者(つまりサンヘドリンの重鎮)たちがこの譬えが彼らに対する「当てつけ」として語られているのに気づいた、とマルコは知らせています。12章12節。

「12:12 彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話された気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。」彼らは激怒します、

しかし、皮肉にも同時に彼らは無力なのです。それは彼らが、群衆の反応をにらんで行動しなくてはならないからです。群衆の立ち位置がイエス側に移るとき宗教権力者たちにとって、最大の危険がやってきます。反対に、群衆が権力者側に立ち位置を変えるとイエスへの危険が最大となるのを、彼らは知っていたのです。主イエスの首にはもう縄がかかったような状況になっています。その気になれば、イエスを捕縛することは簡単にできたでしょう。しかし今のところ、情勢が許しません。主イエスの首の縄を締めることはできません。しかし彼らは、群衆の騒乱を避けつつ——あわよくば彼らを自分たちの側に引き寄せ——イエスを一気に逮捕する機会を虎視眈眈とうかがっていたのです。

「ぶどう園と農夫の譬え」で当てこすられたエルサレムの宗教指導者彼らは怒って出て行きました。しかし彼らは、自分たちの代わりにファリサイ派やヘロデ派の人々を送ります——彼らが巧妙に術策をもちいてイエスに一撃を食らわすことができるように期待しながら。イエスに対する陰謀は、



神殿のすべての執務室に広がりました。今や神の子をとらえる獵の解禁期間が到来したのです。地域の聖職団



ヘロデ大王

(聖職者の集団)からも次から次へとグループが、イエスを捕らえるために駆け引きの罠をしかけます。その第一陣が「ヘロデ派とファリサイ派の人々」だったのです。わたしたちはヘロデ派の人々について詳しいことを知らされていませんが、彼らとファリサイ派の人々の協力は、神殿と王座の間で画策された陰謀であったように思われます。彼らは〈イエス問題〉を共通の課題としてきたのです。

「ヘロデ派とファリサイ派の人々」について記憶しておられるでしょうか。実は彼らは、第1論争物語集(2:1-3:6)の最後に登場します。そこには論争に敗れたファリサイ派の人々の取った行動が記されます。マルコ福音書3章6節。

「3:6 ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺

そうかと相談し始めた。」主イエス殺害の陰謀は、すでにこの時に始まっていたのです。そしてこの主イエスに対する敵意は、第2論争物語集(11:27-12:37)で増幅し、主イエスがエルサレムの宗教指導者たちに当てつけて語ったエルサレムの滅亡を、次の13章で弟子たちに詳しく伝えたと、ついに、14章から、イエスの逮捕劇つまり受難の出来事が具体化していくのです。

今日は第2論争物語集に収められている6つの論争のうちの3番目の論争、第3論争を学びます。申しましたように「ヘロデ派とファリサイ派の人々」が主イエスの許にやって来て罠を仕掛けます。

13節。「12:13 さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。」ファリサイ派の人々



大王の息子ヘロデ・アンティパスとヘロディア

が主イエスに敵対し殺害を画策するのは、福音書を読んでいけばその対立関係から分かるのですが、ヘロデ派の人々がなぜイエス殺害に加担するのか、その理由がわかりにくいと思います。その理由をヘロデ・アンティパスが洗礼者ヨハネを殺害した理由から推測しておきたいと思います。マルコ福音書6章14-29節の記事によると、洗礼者ヨハネはヘロデ・アンティパスとヘロディアの婚姻を非難したために捕らえられます。妻ヘロディアはたいそうヨハネに恨みを抱き、殺そうとさえ思っていました。そのヘロディアに機会が訪れます。ヘロデは、自分の誕生日の祝いに高官や将校、ガリラヤの有力者などを招いて宴会を催します。その宴会の客人たちの前で、ヘロディアの娘〔新約聖書には「サロメ」の名は出てこない。ヨセフ



スには、ヘロディアの娘サロメへの言及がある。

『ユダヤ古代誌』XVIII,5:4)が踊りを披露し、その踊りがヘロデと

その客を喜ばせます。ヘロデが娘

の踊りに褒美を約束すると、母ヘロディアに指示された娘は、ヨハネの首を求めます。客人たちの前で約束した手前もあり、娘の要求を断り切れずに、ヘロデは部下にヨハネの斬首を命じたと伝えられています。

歴史家ヨセフスの報告(『ユダヤ古代誌』XVIII.5.2 [18:116-119])によりますと、

この斬首にはもう少し裏の事情があったことがわかります。ヘロデ・アンティパスは異母兄弟



フラヴィウス・ヨセフス

フィリポの妻ヘロディアに恋慕して、彼女を奪って妻とし、それまで妻であった隣国ナバタイ(北アラビアを支配)の国王アレタスの娘を離婚しようとしします。しかしそれに気づいた、妻は父アレタスのもとへ逃れます。アレタスは軍を集め、ヘロデ・アンティパスの軍を破ります。そこでヨセフスの記事を見てみましょう。

しかしユダヤのある人びとには、ヘロデの軍隊の敗戦は神の復讐であるように思われたが、確かにそれは「洗礼者」と呼ばれたヨハネ

になされた仕業に対する正義の復讐であった。というのはヨハネは立派な人であり、ユダヤ人に正しい生活をおくり、同胞に対する公正を、神に対する敬虔を実行し、洗礼に加わるよう教え勧めたのに、ヘロデは彼を死刑に処したからであった。〔中略〕さてその他の人びとも彼(ヨハネ)の言葉を聴いて大いに奮起させられて彼のもとに集まったとき、ヘロデはヨハネの民衆に対する大きな影響が騒乱をひき起こしはしないかと恐れた。彼らはヨハネが勧めることなら何でもしようという気持ちになっていたからである。そこでヘロデは実際に騒乱が起こって窮地に



陥り、そのとき後悔するよりも、彼によってひき起こされるかも知れない反乱に先手をうって、彼を殺すほうが上策であると考えた。そこでヘロデの疑念のためにヨハネは前述した砦のマカイルスに送られ、そこで処刑された。

つまり洗礼者ヨハネの群衆に対

する人気(評判)が騒乱の火種になるのを怖れたヘロデ・アンティパスが、先手を打って洗礼者ヨハネを処刑したということです。騒乱が起こってその鎮圧に失敗し、治世が乱れれば、彼の兄アルケラオスの領地であったユダヤ地方の場合と同じように、領主は退位させられ、領地が召し上げられ、ローマから地方総督が派遣されて、ローマ皇帝の直轄支配が始まることをヘロデ・アンティパスは知っていたのです。主イエスの登場は、民衆の心(期待)をかき立てるもう一人の人気者(人気のある預言者)の登場なのです。ヘロデが危険視したとしても当然です。ヘロデの宮廷と関係を持ち、ヘロデの統治のお先棒を担いでいたヘロデ派の人々は、主イエスの活動の当初から彼を監視していたのです。

サンヘドリンの重鎮たち(祭司長、律法学者、長老たち)に遣わされたヘロデ派とファリサイ派の人々は、主イエスに質問します。

14節a。12:14 彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせ

ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。」

質問は、主イエスに対する「ほめ殺し」から始まりました。ファリサイ派とヘロデ派の人々の「ほめ殺し」は4つの褒め言葉で成っています。そしてその4つの褒め言葉は、実際には、4つの要求を主イエスに突きつけているのです。1つ目の褒め言葉です。彼らは主イエスに①「**あなたが真実な方**」であることを知っていますと賞賛して、実際は主イエスに真実を要求しているのです——自分たちはそうでないのにです。そして主イエスが真実を語れば、罠に落ちる、と彼らは考えているのです。第2の褒め言葉です。②あなたは「**だれをもはばからない方**」だと持ち上げて、実際には、主イエスに人によって真実を曲げるようなことをしないように要求しているのです——自分たちはそうでないのにです。そして主イエスが誰を



もはばからずに語れば罠に落ちる、と彼らは考えているのです。さらに第3に③主イエスが「**人々を分け隔て**」しない〔直訳「人の顔を見ない」つまり「人の顔色をうかがわない」〕公平無私な方だと褒めて、実際は、主イエスに人の顔色をうかがわないように態度を要求しているのです——自分たちはそうでないのにです。そして主イエスが人の顔色をうかがわずに語れば、必ず罠に落ちる、と彼らは考えているのです。そしてさらに第4に主イエスが④「**真理に基づいて神の道を教えておられる**」と絶賛して、実際は、主イエスが神の前に真理を語ることを要求しているのです——自分たちはそうでないのにです。そして真理に基づいて神の道を語れば罠に落ちる、と彼らは考えているのです。ヘロデ派とファリサイ派の人々には、主イエスを追い詰める自信があったのです。彼らが主イエスに投げかける詰問に、イエスは答えに窮するか、逆に、答えたら答えた途端に罠に落ちると考えたのです。

ほめ殺しが終わるといよいよ質問です。「**皇帝に税金(κῆνσον)**を

納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」(14節b)。この質問はヘロデ派とファリサイ派の、両派の利害と関心を反映しています。ファリサイ派の人々は、皇帝への納税を律法問題(ἑξέστιν)〔おそらく貨幣に刻印された皇帝の像や神々の姿が偶像礼拝になるという問題〕として提示し、ヘロデ派の人々は、政治問題として提示しています〔おそらく税金問題が騒乱の火種となって民衆蜂起が起きる可能性を考えていると思われます〕。しかし税金に関する関心の違いはどうであれ、納税問題を持ち出すことによって、どうして主イエスを罠にかけることができるのでしょうか。

ローマの税金制度の知識が少し必要です。皇帝アウグストゥスから五賢帝(97-180)の時代は、局所的な戦乱はあったものの、ローマ

の軍事力を背景にして、古代世界に類例のない安定と繁栄の時代であったと言われています。

この「ローマの平和」(パクス・ロマーナ 'Pax Romana') と呼ばれるローマ帝国の実効支配を可能にしたのは、ローマによる地中海世界の都市化政策と租税のシステムでした。つまりローマは、全帝国のローマ化を徹底するために、属州の要所に政治、経済、軍事、文化の拠点として、辺境に至るまで〔アレクサンドロス大王に倣って—アレクサンドリアという名の都市は72確認されている—〕ヘレニズム・ローマ型の都市を建設し、東方ではアジア州で約500、エジプトでさえ約40の都市が誕生しました。そしてこれらの都市を街道で結び、「すべての道はローマに通じる」と言われるように、最終的にローマに一元化し(結びつけ)、事有ればローマから派兵をするというシステムを造り上げたのです。

そしてこれに租税のシステムが加わりました。ローマ当局は直接



Mark 12:13-17 Jesus Questioned On
Paying Tax to Caesar



税として土地収益税、人頭税(κῆνσον)を徴収し、間接税として国境関税、道路・橋の通行税などを課しました。しかもこれらの徴税業務は、入札で選ばれたローマ人の「徴税請負人」に認可が与えられると、この「徴税請負人」が現地の徴税業者に下請けさせ、徴税(税金の取り立て)が済むと、今度は逆に、下請けから「徴税請負人」、ローマの官僚および当局、ローマ皇帝に向かう上納のシステムで徴収されていたのです。それゆえローマ支配の苛烈さをより切実に味わったのは、皇帝ないし元老院によって直轄支配される属州民でした。皇帝アウグストゥスは人口調査を実施して、辺境の一寒村にまで一大徴税網を張り巡らします。そのため、パレスチナのユダヤ人は過酷な経済生活を強いられることになりました。福音書の描く主イエスの活躍する世界に



ローマの元老院

は、日毎の糧にもこと欠く賃貸小作人、日雇い労働者、貧しい漁師、羊飼いやなどが登場します。それは、ローマ皇帝、ヘロデ王家一族、祭司、貴族、徴税請負人による富の独占を可能にした一大徴税網に収奪された、ローマの辺境に位置する属州の、都市の繁栄とはかけ離れたパレスチナの農村や漁村の図なのです。そのため、この税制を中心とするローマ支配からの解放運動が頻発しました。「熱心党」(ゼーロータイ)と呼ばれる人々は、ローマからの解放を軍事的に画策したいわば革命分子だったのです。その指導者の多くは「メシア」(油注がれた者、「救い主」)と呼ばれています。さて「税金」を収めるべきか否かという質問が、どうして罨になるのか、少し想像が可能ではないでしょうか。

まずもし主イエスが、(1)「ローマに納税せよ」と答えれば、ローマ支配の正当性を支持したということで、民衆の人気を失墜させることができます。反対に主イエスが、(2)「ローマに納税するな」と答えれば、民衆をローマへの納税を拒否するように仕向けたとして、イエスを政治当局の嫌疑にさ

らすことができます。

しかし主イエスはヘロデ派とファリサイ派の人々の質問に隠れている、主イエスを試そうとする彼らの下心〔直訳「偽善」〕を見抜きます。そこで質問に直接的に答えることをせず、デナリオン銀貨を持ってきて見せるように命じます。15節。

12:15 イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」



アウグストゥス (BC27-AD14) デナリウス 21mm, 3.78g
BC2- AD2, Lugdunum
表: CAESAR AVGVSTVS DIVI F PATER PATRIAE
裏: C L CAESARES AVGVSTI F COS DESIG PRINC
IVVENT ガイウス・カエサルとルキウス・カエサル



ティベリウス (AD14-AD37) デナリウス 19.5mm, 3.7g
AD16 - AD37, Lugdunum
表: TI CAESAR DIVI AVG F AVGVSTVS
裏: PONTIF MAXIM

今回主イエスは、教えでも譬えによってでもなく、実物教育で答えることに決めました。彼はローマ貨幣をもってこさせます。その当時の最も一般的なデナリオン銀貨であれば、皇帝ティベリウスのデナリオン銀貨だったと思われます。表には、皇帝の肖像が刻まれ、また銘が刻まれています。銘は略号を使いながらこう書かれています。「神であるアウグストゥスの子・皇帝ティベリウス・アウグストゥス」[TI(BERIUS) / CAESAR / DIVI / AVG(VSTI) / F(ILIVS) / AVGVSTYS] となっています〔ティベリウスは初代皇帝アウグストゥスの養子で、その称号アウグストゥス(尊厳者)も引き継いだ〕。裏は神官の座に座るティベリウスが刻まれ、「最高神官」(PONTIF MAXIM) と銘刻されています。

主イエスはその銀貨を見ながら、周囲にいるユダヤ人たちやファリサイ派やヘロデ派の人々に向かって問いかけます。16節a。

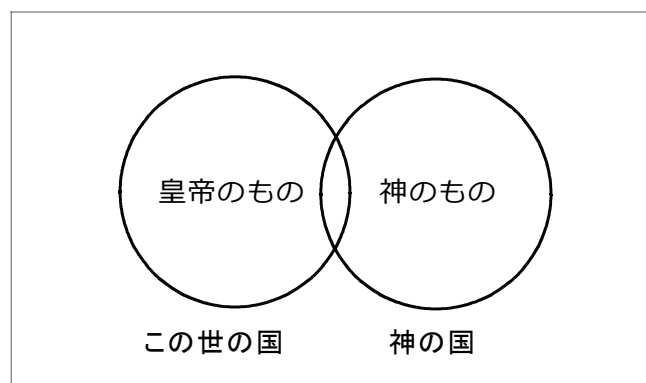
「12:16 彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像(εἰκών)と銘か」と言われた。」

「分かり切ったことだ、それは皇帝のものだ」と彼らは、心の中で、

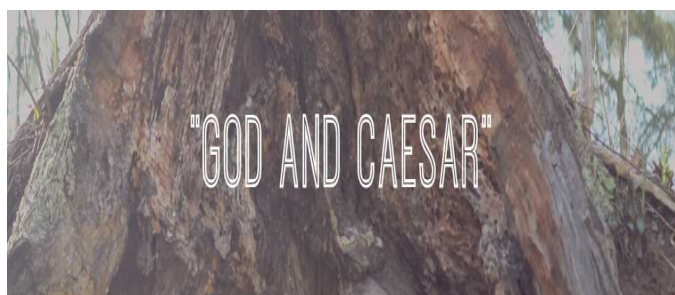
主イエスの質問に苛立ちを覚えたかもしれません。そして彼らが皇帝のものだと告げると、主イエスからは驚くべき答えが返ってきます。16節b－17節。「彼らが、「皇帝のものです」と言うと、12:17 イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。」ファリサイ派やヘロデ派の人々は主イエスに罠を仕掛けましたが、その罠にかかったのは彼らでした（そして実はわたしたちも罠にかかります）。

「彼らは、イエスの答えに驚き入った」とあります。実は驚いたところで、勝負ありです。主イエスは「納税せよ」とも「納税するな」とも答えていないのです。聞き手の自由な解釈に任せているのです。この「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」という断定的な言葉の響きに魅了されて、本当はよく理解していないけれど何かしら答えに納得してしまった人、あ

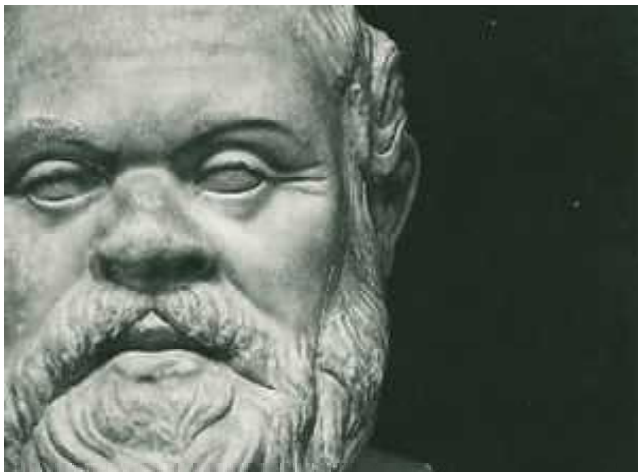
るいは主イエスが明確な答えを出した、と誤解した人は罠に落ちたのです。キリスト教の歴史と神学を魅了してきたこの「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」というよく知られた教えは、主イエスがそれを教えられてから2000年もの間、わたしたちにとって罠で



あり続けています。ほとんどすべてのキリスト者が、「この世のこと」と「神のこと」、神学でよく使われる言い方をすれば、「この世の国」と「神の国」の二つの王国のテーマとしてとらえます。神学の歴史を見ますと、解釈上の多少のニュアンスの違いを見せるものの、ほぼこのパターンで理解されます。しかしそう理解した途端に、真っ逆さまに、その二分法の罠に落ちて餌食になるのです。この世の「ある事柄は国家や政府に属し、またある事柄は神(教会)に属します。この箇所はまさにそのことを教えているのです」と彼ら



は主張します。政教分離の主張にもこの言葉が頻繁に使われます。国家は宗教に介入してはならないし、宗教も国家に介入してはならない。「**皇帝のものは皇帝に、神のものは神に。**」しかしこの言葉は、政教分離の根拠でも、ましてやキリスト者の政治的無関心のいいわけ〔教会は政治的なことから距離を置くべきである、といった無関心〕を支持する言葉でもないのです。そう理解したとき、真っ逆さまに、その二分法の罠に落ちます。そんなことを今日の箇所は言っているのではないのです。人々が、



*I know that
I don't know anything.*

Socrates

1世紀のファリサイ派やヘロデ派の人々と同様に、真の意味を理解をもっていないということは、注目すべきことです。〔これはその率直さから出てくる主イエスの卓越した言語戦略によるものです。ある説教家は主イエスを「素直さの天才」と呼びます。〕

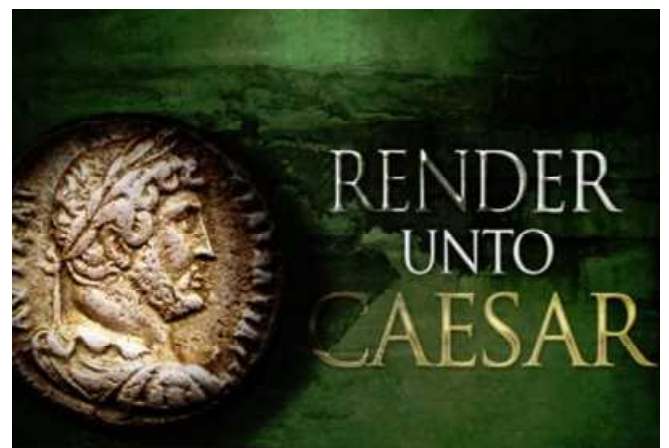
このような言葉の表面的な説得力や魅力によって表層的な理解を与え、深層にある真の意味を覆い隠す表現を〈アイロニー〉と呼びます。日本語では「皮肉」と訳されますが、元来、これは仏教用語の「皮肉骨髓」から取られた比喩的な訳語で、皮や肉のような表層（表面）には達しても、「骨髓」つまり真相や核心には達しないということを意味します。しかし「皮肉」という日本語は、日常的には、遠回しの非難、当てこすりの意味で使うのがふつうです。近代西洋語では、自分の意図する意味と反対の表現（たとえば「君はたいしたものだ」）を使って、意図する意味（この場合は相手に対する軽蔑）を覆い隠す表現法をさします。意味の理解は聞き手の自由に任されます。

この〈アイロニー〉を真理発見

の道具に用いたのがソクラテスです。ソクラテスは表面的に無知をよそおって他人の教えをこうことにより、かえって相手に無知を自覚させ、相手を真の知識に導いたといわれます。これを特に〈ソクラテスのアイロニー〉と呼びます。ソクラテスはいったん自分はあることについてまったく何も知らないという立場から出発します。そしてその無知の立場から、分からないことを率直に分からないこととして、知者に質問をしてまいります。すると最初は知者と呼ばれているその人は得意になって答えます。彼は何でも知っているつもり、分かっているつもりなのです。しかし、やがて、ソクラテスの無知な立場からの質問の答えに窮する場面に立ち至ります。つまりその時、彼は、自分の無知に突き当たったのです。当然ソクラテスの質問に、態度を硬化させる知者もいるのですが、しかし、その自分の無知を知者が認めると、ソクラテスは、今度は、その知者と共に真理の探究のための対話に乗り出します。無知であることは恥ずかしいことではありません。もちろん無知を放置しておくことは恥ず

かしいことですが。無知であることは、生半可な知識で知ったかぶりをしているより、よっぽど生産的なのです。無知から出発して真理に向かって行くソクラテスの問答法を、ソクラテスの産婆術と呼びます。新たな真理の発見者が生まれるのです。今日の主イエスの言葉も、よく分からなかった方は、真相に一步近い、と言っているのかもしれない。

主イエスの「**皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい**」という言葉がアイロニーだとしたら、わたしたちも何らかの真理の発見に向かうことができるでしょうか。できるはずです。「**皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい**」という答えの真の意味は何なのか温ねてみたいと思います。まずわたしたちが分かった気になっていながら、実は、まった



く分かっていないものは何でしょう。か。答えてみてください。「皇帝のもの」とは何でしょうか。そして「神のもの」とは何でしょうか。わたしたちのよく知っている言葉なので、わたしたちはすぐに分かった気になります。「皇帝のもの」とは税金で、「神のもの」とは礼拝や神への献げ物ではないのか、と考えます。しかし主イエスの答えは、何が「皇帝のもの」で、何が「神のもの」なのかについて何も語っていません。むしろ意味の理解を聞き手の自由に任せているのです。デナリオン銀貨を見ているつもりで、「この硬貨は誰の物か」と考えてみてください。

「皇帝のもの」でしょうか。ちがいます。持ち主の物です。皇帝の物ではありません。わたしたちの千円札に夏目漱石の絵がついていても、それは持っている人の物で夏目漱石のものではないのと同じです。しかしデナリオン銀貨には「肖像と銘」がついています。そこで主イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と訊ねます。すると当然「皇帝のものです」と答えが返ってきます。主イエスは「肖像と銘」がついているので、それ

を「皇帝のもの」と断定して、そして「皇帝のものは皇帝に…返しな



さい」と言い切ります。主イエスは明らかに論点を移動させています。ですから、その言い切りに対して「ちょっと待った」をかけなければならないのですが、「皇帝のもの」や「神のもの」に対する先入観も手伝って、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」という言葉の表面的な説得性に負けて、「驚き入っ」てしまうのです。早々に「驚き入っ」てしまわないためには、主イエスの論点移動を見逃さないことが鍵です。皇帝の肖像と銘はふつう皇帝の支配や権力を象徴するものですが、主イエスは皇帝の肖像と銘を、わたしたちが自分の持ち物に書く「名前」と同じレベルで扱っているのです。「名前」がついているのだから、名前の主に返せばいいではないか、という論法です。〔皇帝権力に対する批判が顔をのぞかせています。〕しかし主イエスの言葉は、真理の発見に向かって行

きます。素直な疑問を持つ人には分かるのです。そのために主イエスは、この文脈に「**神のもの**」を置いたのです。主イエスの言葉は、聞く耳のある者には分かるのです。「神のもの」とは何ですか。この文脈では、神の名前のついてるものです。すなわち神の「肖像と銘」がついているものです。神の「肖像と銘」がついているものとは何でしょうか。「銘」(ἐπιγραφή)とは「書き込まれた言」のことです。ヘブライ人ならば分からなければなりません。ヘブライ人への手紙の11章3節にこのような言葉があります。「**11:3 信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。**」そして肖像(εἰκὼν)つまりギリシア語の〈エイコーン〉は、創世記1章27節で「**1:27 神は御自分にかたどって**〔口語訳「自分の**かたち**に〕**人を創造された**」という聖句の中の〈**かたち**〉という言葉です。「神のもの」とは何でしょう。神の「肖像と銘」が刻まれているものです。**究極的には人間も自然**

も動植物も含めて、創造されたすべてのものは「神のもの」なのです。神の「肖像と銘」が刻まれているのです。



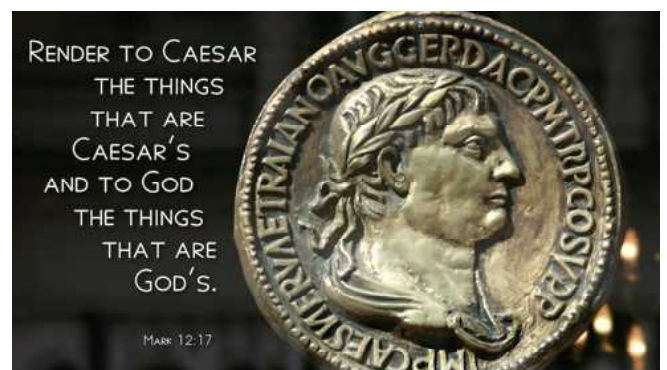
主イエスの発想の根底には、神が世界を創造されたという創造論があります。主イエスはいつも、その創造論から発想するのです〔空の鳥を見よ、野の花を見よ〕。しかし、わたしたちは、人間がその知恵と力を使って——神が存在しなくても——さまざまな新しい物を発明し創り出し、世界を変え続けている、と主張するかもしれません。しかしです、わたしたちの身の回りを取りまいてるさまざまな製品や物品は、すべて神が造られた被造物(資源)を加工した加工品なのです。

聖書は——旧約聖書も新約聖書も——二つの王国論と何の関係もありません。このような「この世のもの」と「神のもの」あるいは「この世の国」と「神の国」という二分法は、ユダヤ・キリスト的信仰の性格にまったく反しているだけではなく、イエス・キリスト

を遣わして、神が地上を舞台にしてその支配と救いの働きを開始されたという良き知らせを台無しにしてしまうのです。神が創造された世界を二つの王国に分けようとするすべての試みは、反ヘブライ(セム)的、反キリスト教的、非聖書的、倫理的に破滅的な試みなのです。

主イエスの答えは、真相を隠しつつ、心ある人を真相に招こうとしているのです。人間が真に帰依すべき方に目を向けさせようとしているのです。人が、すべてを創造された神の前に、人間のあるべき姿を回復する時、この世界の真の姿が見えてくるのです。新しい一週も、わたしたち自身を含めすべてのものの創り主である神を憶えつつ、歩んでまいりたいと思います。祈りましょう。

2019. 1. 27 日本基督教団千歳丘教会礼拝



12:13 さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。

12:14 彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」

12:15 イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」

12:16 彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、

12:17 イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

12:13 Καὶ ἀποστέλλουσιν πρὸς αὐτόν τινας τῶν Φαρισαίων καὶ τῶν Ἡρωδιανῶν ἵνα αὐτὸν ἀγρεύσωσιν λόγῳ.

12:14 καὶ ἐλθόντες λέγουσιν αὐτῷ, Διδάσκαλε, οἶδαμεν ὅτι ἀληθὴς εἶ καὶ οὐ μέλει σοι περὶ οὐδενός· οὐ γὰρ βλέπεις εἰς πρόσωπον ἀνθρώπων, ἀλλ' ἐπ' ἀληθείας τὴν ὁδὸν τοῦ θεοῦ διδάσκεις· ἔξεστιν δοῦναι κῆνσον Καίσαρι ἢ οὐ; δῶμεν ἢ μὴ δῶμεν;

12:15 ὁ δὲ εἰδὼς αὐτῶν τὴν ὑπόκρισιν εἶπεν αὐτοῖς, Τί με πειράζετε; φέρετέ μοι δηνάριον ἵνα ἴδω.

12:16 οἱ δὲ ἤνεγκαν. καὶ λέγει αὐτοῖς, Τίνος ἡ εἰκὼν αὕτη καὶ ἡ ἐπιγραφή; οἱ δὲ εἶπον αὐτῷ, Καίσαρος.

12:17 ὁ δὲ Ἰησοῦς εἶπεν αὐτοῖς, Τὰ Καίσαρος ἀπόδοτε Καίσαρι καὶ τὰ τοῦ θεοῦ τῷ θεῷ. καὶ ἐξεθαύμαζον ἐπ' αὐτῷ.